

平成 24 年度 第 2 回 石狩市社会教育委員の会議 議事録

日 時 平成 24 年 11 月 26 日（月） 午後 2 時～4 時 10 分

会 場 石狩市公民館第一研修室

出席者 委 員 長：木村純

副委員長：大橋修作

委 員：設楽正敏、石井量子、山田治己、佐久間有里、青木昭子、相馬保、大黒利勝、
古村えり子、平紀子、高橋美恵子

事務局 教育長：鎌田英暢、生涯学習部：部長 百井宏己

社会教育課(兼公民館)：課長 東信也、主査 樋口潤作、主任 前野加代理

社会教育主事：西山隆之（兼社会教育課主任）

傍 聴 なし

会議内容

1 鎌田教育長あいさつ

去る 10 月 12 日に、前 樋口教育長の後任として就任いたしました。間もなく年末を迎えるこのお忙しい時期にお集まりいただき、誠にありがとうございます。私は福祉分野での仕事が長く、そこでの経験から得た考えは、福祉の原点はやはり人づくりが鍵だということで、その点では教育についても同様であると考えております。特に社会教育、地域教育の視点からは、まちづくりの観点で、学ぶ心を育て、人を育てることが、特に求められていることだと考えております。市が目指す教育の基本理念、さらには施策の方向性を定めた石狩市教育プランにございますように、いつでも、どこでも、誰もが学ぶことができる環境づくりに向けて、鋭意取り組みを進めております。なかでも、いしかり市民カレッジにつきましては、ご承知のとおり、年間約 50 講座、受講者にして年間 1,700 名を超えるなど、着実に市民主体の学びの場として定着してきておりまして、昨年はその先進的な取り組みが、総務省の市町村の活性化施策 77 事例として選定されたところでございます。

ご承知のとおり、本市の高齢化率は、既に国の平均値を上回っております。今後ますます進むであろう少子高齢化社会において、市民の皆さんが生涯にわたって豊かで充実した人生を送るには、生涯学習、あるいは地域教育のさらなる充実が求められております。地域における様々な学習活動をとおして、その広がりや地域課題の解決にもつながると考えております。本日の会議では、委員の皆様様の様々な立場、また経験などから、本市の生涯学習・社会教育のさらなる充実と課題の解決に向けて、様々なご意見をいただきたいと思っております。本日はこの後、石狩市社会教育委員の会議におけるこれまでの取り組みと、これからの課題について、前委員長の徳田昌生様より大変貴重なご講話をいただけるとのことですので、どうぞよろしくお願い申し上げます。最後になりますが、本日の会議が実のあるものとなり、委員の皆様のご活躍をご祈念申し上げまして、ご挨拶とさせていただきます。

2 木村委員長あいさつ

皆さんこんにちは。今年も残すところ 1 カ月少しとなりました。こういうストーブを囲んで、トラディショナルな建物で会議をするのは良いですね。前回の会議が終わってから今日までの間、社会教育に関する全道的な研修会などが続いて開催されまして、委員の皆様にもご参加いただきましたが、私も皆様を代表して貴重な機会をいただき、勉強することができました。今日は徳田前委員長にお越しいただきましたので、これからの石狩市の社会教育をどうするか、社会教育委員がどういう役割を担っているのかについて、皆様と一緒に討議したいと考えておりますので、よろしくお願いします。

3 研修報告

① 平成24年度全道社会教育委員長等研修会（7月12日～13日、札幌市）

（大橋副委員長より報告）

7月12日、13日の2日間、かでの2.7で開催されました研修会について報告します。1日目が和歌山大学 山本健慈氏の講演でした。主な内容は子育てについてでしたが、特に親が育つ場面を作ることが大切だというお話でした。昨今、家庭における教育力の低下ということが言われておりますが、昔と比べて果たして本当に低下しているのかという話題になりまして、低下というよりもむしろ、家庭教育の困難というべき課題が増えてきたのだというお話をされておりました。子どもは集団生活の中で色々な体験をすることが必要なのですが、親も子も含めて、体験の機会が今は少なくなってきており、子育て・家庭教育の姿がどうあるべきかについての話もありました。

2日目は、参加者が4会場、さらに各班に分かれてグループワークを行いました。私はAグループの7班になりましたが、子育ての体験、各地での取り組みについて、特に恵庭市の通学合宿の取り組みについて詳しく紹介されておりました。

② 平成24年度石狩管内社会教育関係職員等研修（7月6日、石狩市）

（石井委員より報告）

7月6日に、花川北コミュニティセンターでの研修会に参加してきました。私は職場の中で、よくロールプレイングという研修を受けていたのですが、それとはまた違った研修でした。座るテーブルが変わって、最後にまた最初と同じテーブルに戻ってくるのですが、テーブルが変わることにより、また色々な意見が出てくるので、とても勉強になりました。今回の方法を、町内会などのコミュニティの中で取り入れていくと、より話が広がっていくのかなと感じました。

③ 平成24年度フォーラム石狩（10月13日、千歳市）

（相馬委員より報告）

3名の方から実践発表がありました。当別中学校の石田先生、琴似工業高校定時制養護教諭の中村先生、日高青少年自然の家の中田氏でした。私が印象に残ったのは、生活アンケートの活用と望ましいコミュニケーションを学ぶ取り組みの中で、小中学校における、児童会・生徒会の交流会が行われているということでした。琴似工業高校の中村先生の事例紹介では、定時制ということで、不登校、非行、中途退学などの色々な問題を抱えた生徒が集まっている中で、映画の制作をとおして、生徒たちがひとつになったということに、とても感動しました。こうした取り組みによって、問題を抱えた子どもたちでも、立派に成長していくことができるのだと感じました。青少年自然の家の事例については、指導者と青少年団体との関わり方についての現場の声を聞くことができました。最後に北海道医療大学の富家教授の講演がありましたが、家庭・学校・地域の連携がいかに大切かということを学んできましたし、私個人としても、地域の中に入って、そういうことに取り組んでいきたいと感じました。

④ 平成24年度石狩管内社会教育委員等研修会（10月13日、千歳市）

（木村委員長より報告）

今、相馬委員からご報告のありましたフォーラム石狩の終了後に、引き続いて開催されました。共通のキーワードはコミュニケーションでした。まずは6班によりグループワークが実施され、その後NPO法人教育キャリアプロデュース代表の三井貴之氏の講演がありました。このNPOは、夕張市に提案して、学校の副読本的な「夕張オールインワンブック」というものを作成して、夕張を学ぶというキャリア教育の再構成を提案しました。その中で、夕張市立緑陽中学校の生徒が、行政や農協、再生市民会議などと協

力して、東京都庁でミニ物産展を開催した例などが紹介されていました。その他、札幌市の麻生商店街、子育て支援ワーカーズ、札幌市青少年女性活動協会、北翔養護学校土曜友の会などと協力して実施したキャリア教育の報告をとおして、社会やコミュニティの在り方を変えていく「新しい公共」の取組の意義についての講演がされました。

今回のグループワークと講演を聞いて私が学んだことは、第一に、地域のつながりを作り出すためには、地域を知る学びや、地域課題を共有する学びが必要であるということです。グループワークの中では、社会教育委員がそれぞれの市町村で、地域課題に取り組む学習に踏み出すことがなかなか難しいのだということが話し合われました。しかし、石狩市では既に、市民カレッジがそういう問題に取り組んでおり、十分に役割を果たしていると感じました。第二に、地域課題の共有を基礎にしながら、市民が共に取り組むプログラムが求められているということです。話し合っているだけではなく、実際に一緒に何かに取り組んで、その取組の中でお互いに学びあい、つながりを作ることが大切だと感じました。第三に、社会教育委員の役割として、地域の人々の学びの核となることが最も期待されているのだということでした。

⑤ 第52回北海道社会教育研究大会（11月1日～2日、登別市）

（山田委員より報告）

全道社会教育研究大会の第6分科会、文化・スポーツによる地域づくりというテーマの中で、提言者として、市民カレッジの誕生から、課題、今後の展望などについて発表してきましたが、参加者である他市町村の社会教育委員の皆さんとは、私の考えている社会教育というものが少し違うなと感じました。まず最初に質問があり、行政が中心になって取り組まないと、市民カレッジのような事業は長続きしない、すぐに消えるだろうと言った委員がいて驚きました。今までの社会教育は、社会教育主事や公民館主事などの行政が主体となって事業を行ってきましたが、どうやらまだ全道の中では多くの地域が前者の考え方を持っているのだと感じました。そのためか、社会教育委員が具体的にどこまで関わればよいのか、などといった質問がどんどん出てくるのです。それは研修のテーマに沿った質問ではないと感じましたが、会場の社会教育委員の皆さんは、とにかくすぐにでも実践できる答えを欲しているような雰囲気でした。私も市民カレッジの創立時から関わっていますが、これからの社会教育は、行政中心だと続いていかないと私は思っています。石狩市はボランティアと行政の協働で実施しており、この姿が良いと考えていますので、今後も続けていきたいと思っています。

⑥ その他（西山社会教育主事より説明）

補足として説明させていただきます。只今ご報告いただきました全道社会教育研究大会におきまして、皆様のお手元にもございます資料のとおり、全国社会教育委員連合発行のニュースレターを配布させていただいております。この中で、政策調査会の文部科学省部会において、全国社会教育委員連合が社会教育についてのヒアリング団体に初めて指定されたという報告がございました。これはつまり、現代において社会教育の必要性というものがあらためて見直されてきて、社会教育委員の皆様の知恵と力をお貸しいただきたいと国が考えているのだという説明がございました。

木村委員長：私は社会教育委員の皆様がどのように研修を受けていらっしゃるのだろうかと思いながら、千歳と登別の研修に参加させていただきました。先程、相馬委員のご報告にあったように、琴似工業高校定時制の生徒たちが映画制作にたずさわる中で、生徒が途中で来なくなることがあっても、年度をまたいで取り組むことでそれを克服し、最終的には140人の生徒の内、70人近くが参加するようになり、上映会を成功させたというお話でした。この事例は全道的にも話題を集めており、問題を抱えた生徒でも一生懸命取り組んでいるということに感銘を受けました。登別の大会では、全国社会教育委員連合の坂本理事が基調講演をされまし

た。坂本理事は、もともと北海道の置戸町で社会教育主事をされていた方で、今、公民館での社会教育がどのようになっているのかについて、わかりやすく説明されていました。山田委員の報告は非常に良い内容だったのですが、おそらく他市町村の社会教育委員の方々は、自分の町でいしかり市民カレッジのような取り組みをするのはハードルが高いと最初から決めつけてしまい、内容の議論ではなく、社会教育委員は何をすれば良いのかなど、すぐにも使える答えを聞きたいという様子になってしまったのが残念でした。いしかり市民カレッジの実践については、今後色々な機会を作って、北海道の中でも紹介しながら、社会教育に関わる方に広く参考にしていただけるような取り組みが必要なのではないかと思いました。

山田委員：社会教育委員の皆さんも、どちらかと言うと高齢化の傾向にあります。実際にいしかり市民カレッジにおいても、スタッフも受講者も65歳位の高齢者が多いのです。新しい社会教育の担い手を今後どうしていくのかという点と、公民館などを見ている、女性の利用者が非常に多いと感じますので、行政においても女性の視点に立つという意味で、社会教育主事など、女性の若手行政職員の育成も必要ではないのかと考えます。

木村委員長：坂本理事の講話でも、社会教育への参加者は女性が非常に多いのに、事業を進めるのは男性が多いとおっしゃっていました。色々学ぶべきことが多くあるようですので、これらを活かしながら、石狩の社会教育について考えていきましょう。

4 徳田前社会教育委員長講義

ただいま、ご紹介いただきました徳田です。今日は私が6年間、社会教育委員として取り組んできた事柄についてご紹介いたしまして、これからの課題という難しい問題になりますが、私の考えを述べさせていただきます。

まず、社会教育とは一体何だろうかという議論になりますが、これは様々な考えがあるかと思います。端的に、学校教育以外は全て社会教育であると一般的に言われますが、具体的に私が考えている社会教育は、最初に生涯学習が考えられます。そして家庭教育と地域教育があり、これらは結びついている場合もあります。また、学校で実践するにはなかなか難しい問題もここに含まれていると思います。そして、芸術文化・スポーツ振興もごさいます。これらの中で私が重点的に取り組んできたのが、生涯学習の分野です。また、家庭教育・地域教育の分野についても、少し取り組んできました。

まず生涯学習ですが、石狩に市民大学を作ることができないかと個人的に考えました。9年程前に、静岡市で全国規模の研修会が開かれ、そこで清見潟大学塾についての基調講演がありました。これは非常に面白い取り組みで、市民参加型の生涯学習システムでした。とりわけ市民が中心になって動いて市民大学を作っており、当時私は、自分の退職後に機会があればやりたいと強く感じました。そして、平成18年から社会教育委員の会議の委員長を務めることになり、社会教育の中でも生涯学習がかなり大きなウェイトを占めていると考えていたことから、市民大学的な仕組みを作ることができないかと考えました。

市民カレッジを作る背景には、現代は高齢化社会であり、生涯学習が必要になってきているということが、まず1点目の理由として挙げられます。また、石狩市民の中には、札幌で仕事をしている方が多く、住居は石狩にありながら、現役時の意識は札幌市にあるという方がほとんどです。そういった方が退職後、実は石狩の文化歴史、地域などのことをよく知らないという現状がありまして、そういう方々に石狩のことを知っていただく機会づくりが必要だというのが2点目の理由でした。

具体的な進め方として、社会教育委員の会議の中で、市民大学づくりについて提案しましたが、最初はあまり意見が出ませんでした。年3回程度の会議の中では時間的な制約もあり、会議外で2回、意見交換

会を開催しました。当初提案した私のイメージは、市民大学が市民と直結して学んだり教えたりするシステムで、行政のサポートを受け、大学、民間サークルなどと連携して運営し、それが生きがいづくりやまちづくりにつながるというイメージでした。しかし、社会教育委員の会議の中では、実現するには少し難しいのではないかという意見が多くを占めました。そこで、まずはもう少し取り組みやすい形で考えましょうということになり、学びのスタンプを提案しました。石狩市内では、既にかんりの数の講座やセミナーが開催されていましたが、これらの情報が市民に十分伝わっていませんでした。市広報もありましたが、情報の見落としや、原稿の締め切りが早いことなどから、別な形で情報を一元化して伝えられる仕組みを考えてはどうかということになりました。

学びのスタンプは、大学の授業を受けると単位が貰えるように、手帳にスタンプが貰える形にして、一定数貯まると市長から修了証を授与されるというように、楽しみながら学べる仕組みを作りました。社会教育委員の中から6名ほどで分科会を作り、そこで検討した基本構想を社会教育委員の会議にはかり、了承を得ました。実際に学びのスタンプを運営するにあたっては、数名の社会教育委員と、ボランティアの方々と運営委員会を組織しました。こうして2年程かけて、学びのスタンプについて検討を進め、それから市民大学の立ち上げについての検討を始めました。

市民カレッジづくりの理由の1つである現代の高齢化社会化には、生きがいづくりが必要であり、そのためには、市民が望む時に、いつでもだれでも、学んだり教えたりできるような、継続的、総合的な学習システムが必要であるということをお案として出しました。現在まだ実現していませんが、当初から厚田・浜益キャンパスの構想もありました。市民カレッジで学んだ成果はまちづくりに活かすことができ、またここで生まれた人のつながりによって、新たな交流が深まるということも考えていました。

実際に学びのスタンプに取り組むにあたって、運営委員会を月に2回、計41回開催しました。その中では色々なことを検討しました。後ほど、あい風通信として実現した講座情報の収集についても、ここで検討されたものです。将来的に市民大学を作ろうという検討もここで始めており、6、7名のメンバーにより市民カレッジ検討グループを作り、14回の会議を経て具体的な骨子を作りました。この時に、学びのスタンプ運営委員会と、生涯学習ボランティアの会とがひとつになり、いしかり学びをつくる会となりました。この時点で、当初の社会教育委員4名ほどがメンバーとして関わっており、現在、社会教育委員である、相馬委員もメンバーにいらっしゃいました。現在も、市民カレッジの運営委員25名のうち、元社会教育委員は3名おりますし、色々な方に関わっていただいております。

そうして、学びのスタンプがスタートしてから8カ月ほどで市民カレッジが開校しました。開校式は市民図書館で行い、学長である田岡市長、市議会議員、教育委員の皆様をはじめ、100名程の方々に参列いただきました。市民カレッジは、ボランティアである「学びをつくる会」と、教育委員会の協働で運営をしております。メンバーは総務広報グループが12名、企画事業グループ13名で、2グループのいずれかに属し、この他に数名がまちの先生推進チームに加わっています。立ち上がり方を時系列にまとめると、平成18年に社会教育委員の会議に提案し、当初は学びのスタンプからスタートし、平成19年から市民カレッジの検討、そして、いしかり学びをつくる会として統合し、平成21年に市民カレッジが開校という流れになります。現在の組織としては、運営委員会が中心になっており、学長は田岡市長、そして現在、社会教育委員でもある山田委員が、運営委員長をされております。運営委員会だけで事業をしているのではなく、様々なところと連携をとっており、そのために年1回、連絡協議会を開催し、様々な意見をいただいております。市民カレッジは受講料と年度会費を中心に、140万円ほどの予算規模で運営しております。市からは予算をいただいておりますが、消耗品、印刷代などで15万円分ほどを負担いただいております。このほか、申込受付や資料印刷など、数名の社会教育課職員に関わっていただいております。

講座については、運営委員会が企画・運営している講座が主催講座で、5つのコースがあります。このほかにまちの先生講座があります。市民の中には、豊富な知識と経験をお持ちの方が大勢おり、そういつ

た人材を発掘し、教える側になってもらおうというものです。札幌市のご近所先生講座を参考にしてスタートしましたが、石狩市のものは独自性があり、札幌市とはまた少し違ったものになっています。平成23年度は、主催講座19講座49回、まちの先生3講座10回の、合計59回実施しました。回数だけで見ると、90分の講座を週1回開催している計算になります。このほかに、連携団体が92団体あり、これらの講座を受講しても、学びのスタンプを押してもらえます。平成23年度の連携講座は443回開催されました。主催講座と合わせると、年間約500回以上の講座が市内で開かれていることになります。これら講座の情報発信についてですが、毎月、あい風通信お知らせ版というものを発行して、新たな講座情報を発信しているほか、年4回の発行紙でも、様々な情報を発信しております。パンフレット表紙の水彩画は、市民カレッジのために、社会教育委員である大黒委員が描いてくださいました。石狩の象徴である石狩大橋や石狩灯台をモチーフに描かれており、これも手作りの市民カレッジのひとつと言えます。市民カレッジのシンボルやロゴマークも、市内在住のデザイナーに考案していただきました。

もうひとつ、ホームページを独自に作り、講座情報の発信などをしております。受付業務については教育委員会に担当していただいておりますが、ホームページ上での受講申し込みも可能です。多い時は一ヵ月で900から1,200件ほどのアクセスがあります。都道府県ごとのアクセス件数の統計をとっていますが、海外からのアクセスもあり、非常によく見られているようです。今年の10月14日に北大の教授を招き、はやぶさに関する講座を開催しました。ホームページには、全講座の写真と講座内容をトピックスとしてアップしており、どのような講座をしているのかわかるような内容づくりをしています。

学びのスタンプの修了証授与式は年2回行っています。最初は90スタンプのゴールド修了証まで集めるのに数年かかるという想定で、それ以上の修了証は考えていませんでしたが、すぐに100スタンプ集めるような受講生が現れて、現在は500スタンプまで集まっているということです。マスターまで設けております。学長である市長から修了証が手渡されるということもあり、受講者にとっては励みや楽しみになっているのではないかと思います。この手帳やあい風通信の郵送料だけでも、1,000円の年度会費では財政的に厳しいのですが、幸いにも講座の受講生が増えてきているので何とか成り立っているというところです。

平成23年度の受講者はおよそ1,930名になりました。石狩市の人口6万人に対してですので、札幌市の人口180万人に換算すると、6万人位が受講したということになります。これらの実績が、総務省から先進的な取組事例として認められました。道内から選ばれたのは、創成川公園と市民カレッジの2例でした。このようにして、社会教育委員の皆さんに随時報告してご意見をいただきながら、私自身は生涯学習の分野では、市民カレッジにかなり力を入れて取り組んでまいりました。

次に家庭教育・地域教育への取り組みについてご説明します。背景の一つ目としては、石狩市教育プランの「確かな学力を育む教育の充実」という項目で、「家庭学習習慣の定着」について言及されており、また、子どもあいプランの「子どもの生きる力を育てる」の項目で、「確かな学力の営み」について言及されております。当時、いしかり子ども総合支援会議に私も加わっておりまして、「確かな学力」と「居場所づくり」という2つの部会がありました。その1つの部会で、地域の人材を活用した寺子屋事業を提案することになりました。しかしここでは、具体的にどんな方策を進めるか、どこでやるのかなどについては検討されずに終わりました。背景の二つ目としては、小中学生の学習状況調査の実施がありました。毎日朝食を食べている生徒の割合は、全国から少し低い位でしたが、家庭学習の時間については、全国平均をかなり下回っていました。また、テレビを見たり、テレビゲームをする時間が全国平均より長い傾向にありましたが、好ましい点としては、読書習慣が全国平均より高いということがありました。こういったことに多くの時間が費やされ、家庭学習の時間が短いということは、子どもたちにとっても不公平な状況であります。改善しようと家庭に呼びかけても、今は共稼ぎの両親が多く、家に親がいる時間が少ないため、親子の対話が少なくという現状があります。こういった状況も、子どものいじめや、事件に巻き込

まれるということに結びついている可能性もあります。これを何とか考えようにも、学校教育ではそこまでカバーできない、やはり社会教育ではなかろうかということで、寺子屋事業の提案をいたしました。この時、学校支援地域本部事業というものが発足しておりまして、私は運営委員長を務めておりました。これも社会教育委員の会議の中で随時報告を行い、委員の皆様にご協力をお願いしていました。この事業は当初、文部科学省の委託事業として始まりましたが、学校に子どもたちの育成をすべて押しつけるだけでは、先生方も忙しすぎて、問題の解決につながりません。それでは、家庭の中でもっとしっかり教育できればいいのではないかという声もありますが、現実的には家庭だけでもうまく解決できません。そこで、地域全体で子どもを育成していくような仕組みが必要ではないか、というのが文部科学省の考え方で、石狩市でも平成20年から3年間の計画で進められてきました。大きなねらいは、子どもの教育環境をより良くしたいということですが、地域の住民が学校のことを手伝うのですから、学校の先生はもっと教育に専念していただくという点、そして活動をとおして、生涯学習社会を実現することができるという点、そして地域の教育力向上につながる点の3つが具体的なねらいとして実施されています。実際にこの事業は、社会教育課が事務局となり、コーディネーターを配置しております。コーディネーターが学校の要望を聞き、地域に呼びかけをしております。地域でのお願い先としては、町内会、高齢者クラブや地域ボランティアの方々に協力をお願いしています。具体的な内容としては、学校の花壇づくりやグラウンドの整備、また学習支援では合唱、俳句、毛筆、ミシン掛けの指導、夏は水泳、冬はスキー学習などにご協力いただいております。まさに、社会教育委員が力を発揮することを期待される場だと思えます。この事業は、平成24年3月までは、地域限定で進めており、その後、対象地域を拡大し、あい風寺子屋事業も並行して進めることになりました。

この経緯は、家庭教育・地域教育というものは、社会教育委員もある程度担うべきものではないかという考えから、平成22年度の第1回目の社会教育委員の会議と、会議外で意見交換会を設けて、地域教育について検討しました。そして第2回目の社会教育委員の会議で、あい風寺子屋として提言することに決定しました。その後、教育委員と社会教育委員との意見交換会などを経て、平成23年7月から、花川南小学校の放課後こども教室の時間を使って実施することになりました。時間の関係上、対象は主に低学年となっております。社会教育委員の皆様にご認識いただくことと、ボランティアとしての参加、意見や提案をしていただきたいとの思いから、見学会をとおして意見交換をしていただきました。

学校支援地域本部事業は、花川北中学校地区で学校のニーズにあわせて現在も継続しております。そのほか、花川南小学校が新たに加わりまして、月曜と金曜の放課後に、あい風寺子屋として取り組んでおります。注目すべきは、勉強だけではなく、伝承あそびや茶道、華道などの色々な文化活動も教えているということです。勉強については、算数などのほか、今年から英語も取り入れましたが、確かな学力を育むという視点からは、もう少し勉強の時間があってもいいのかなと思います。コーディネーターやボランティアが中心になって進めておりますが、社会教育委員の方もお手伝いいただければと思います。

以上、生涯学習と、家庭教育・地域教育について取り組んできた内容をお話しましたが、芸術文化・スポーツ振興については、あまり取り組むことができませんでした。社会教育委員の活動には他にも様々な分野がありまして、例えば、社会教育計画・事業の策定、検証や評価などを社会教育委員がやっている市町村があります。こういうことも、場合によっては必要なのかなと思います。現委員長の木村先生は、社会教育の専門家ですので、そういう立場から取り組まれるのも良いかと思います。家庭教育・地域教育は非常に重要な分野ですが、今の寺子屋事業だけでは十分ではありません。寺子屋については他の地域でやって欲しいという声がありますが、それを担う人材がなかなか見つからないため、現在は花川南小学校のみとなっております。将来的には、厚田、浜益を含め、他の地域でもできれば良いと思います。青少年の安全・健全育成については、町内会関係でも取り組まれていることと思いますが、社会教育として取り組むことがあっても良いと思います。社会教育委員の職務として、地域と行政とのつなぎ役ということがよく言われますが、これは他の審議会委員などではあまりできないことであり、これこそ社会教育委員が積

極的にたずさわって果たす役割だと思います。地域に入って行ったり、リーダー的な人材の育成を考えることが必要なのではないでしょうか。しかしながら、こういう動きは、実際には社会教育だけで進められることではなくて、学校での教育もまた重要な要素ですので、社会教育委員と教育委員との連携も必要であるのではないかと考えます。以上が、私が6年間の任期で取り組んできた内容です。社会教育委員は、意見交換や審議だけではなく、実際的な活動も必要なのではないかなと思います。

木村委員長：大変貴重なお話をありがとうございました。お話いただいた内容をもとにしながら、これからの石狩市の社会教育の課題や、社会教育の役割について話をしていきたいと思います。私は、石狩の市民カレッジ立ち上げ時にお手伝いをさせていただいた経緯がありました。さっぽろ市民カレッジは現在13年目に入ったのですが、年間の受講者数がようやく4,800人になりました。いしかり市民カレッジが約2,000人も受講者があるということは、町の人口比からすると驚くべき数になります。一体どういう人が来て、学んでいるのだろうかと関心があるのですが、いかがでしょうか。

徳田前委員長：仕事を退職したものの、まだまだ健康で元気な方がたくさんおられます。そういう方が受講生として参加するケースが多いようです。したがって、50代をはじめ、60～70代が一番多いように思います。また、学習意欲が強くリピーターとなる方が多く、一人一人が色々な講座を受講しているようです。いつも見かける顔ぶれの受講生が、3割～4割ほどいると思いますので、合計人数と実人数とでは異なると思います。もう少し若い方に受講していただきたいと考えており、夜間や土曜に開講したこともあるのですが、なかなか集まらないという実態があります。

木村委員長：原子力発電や都市エネルギーなど、トピックス的な講座を開催しているようですが、その場合はいかがでしょうか。

徳田前委員長：そういう講座には、割と40代、50代の方も見受けられますが、大多数は60代以上の方のようです。

古村委員：私は岩見沢市民カレッジに関わったことがあります。岩見沢の場合、企画はほとんど行政がやっておりますが、参加者の中から次の運営委員が出て、常連の方が役員になっていました。いしかり市民カレッジの場合は、常連の方が役員になるのでしょうか。それと、女性の参加は何割位ありますでしょうか。

徳田前委員長：最初のご質問ですが、運営委員は、当初立ち上げた時のボランティアがそのまま継続して委員になっていて、常に次年度どうしていくかということを考えながら動いています。また、年1回、運営委員と受講者が一緒に交流会を開催しておりまして、そういった場所で、一緒に運営してみませんかと声をかけて、受講者の中から委員になっていただいた方も数名おります。また、女性の参加も結構多くいると思います。

山田委員：そうですね、受講者のうち60%近くは女性だと思います。

木村委員長：座学型の学習というのは男性が多く、体験型の学習は女性が多いという傾向がありますが、いしかり市民カレッジの場合は女性が多いのですね。

山田委員 : 私は岩見沢の例も調べたのですが、最初から事前登録制にして、年間9,000円ほどの受講料を集めていたと思います。予算が確保できるので、オリンピック選手などの著名人をたくさん講師に呼んでいるようです。しかし、石狩に比べると非常に費用が高いという印象を受けました。いしかり市民カレッジにも今後の課題はありますが、岩見沢のような事前登録方式をとらなかったことは、これもまた良い側面なのかなと思いました。

全道大会で、なぜ石狩で市民カレッジを始めることができたのかと質問されたのですが、その理由のひとつとして、石狩のことを知りたいと思っている市民が非常に多いということが、アンケートなどでわかりました。そこで、最初にいしかり学コースを作りました。石狩市の特徴として、札幌に近いこともあり、サイエンスアイの先生方や、市民カレッジの運営委員にも見られるように、大学の教授などが多く住んでいるということがあります。また、札幌市の学校の教員で、石狩市から通勤している方も多いと聞いておりますし、石狩市には教育関係者がたくさん住んでいるという印象があり、お陰で講座の企画もスムーズにできています。

先程、徳田先生のお話でもありましたが、現職中は札幌人で、退職してから石狩人という方も多いと思います。皆さんの学習ニーズがあるから、市民カレッジができたのだと考えています。ただ、石狩だけを中心とした学習テーマだけでは不十分です。時代にあったタイムリーな学習テーマを提供する必要がある、はやぶさ、原子力発電所などのトピックスをテーマとした講座や、藤女子大学などの近隣大学をはじめ、94ある連携団体などとの連携を進めています。また、石狩には新港があり、600社以上の企業が操業しています。私は、この石狩湾新港のことも、もっと市民に知って欲しいと思っています。去年は、さくらインターネットの経営者を講師に招いたほか、データセンターの見学も実施しました。そういった新たなことをしていかないと、マンネリ化しかねないと思っています。

木村委員長 : 定時制札幌市民から全日制石狩市民になった時に、石狩のことを知りたくなる状況は当然ありますし、こういう状況をよく地域デビューと呼んでいます。ただ心配なのは、どんどん高齢化が進んでいきますし、厚田・浜益での今後の展開を考えると、市民カレッジ単独で広げていくことは難しく、やはり行政の支援が必要かと思っています。また、講座だけではなく、高齢化や過疎化などの問題も含め、合併後の新しい石狩市民としてのアイデンティティを、どのように共有していくかという、新しい課題があると思っています。

高橋委員 : 私個人、社会教育委員として2年間の間に、何をすれば良いのかよくわからないと感じています。たった2年間の任期しかないので、あっという間に過ぎてしまう気がします。地域では委員それぞれで様々な活動をされていると思いますが、社会教育委員としての方向性がよくわかりません。

木村委員長 : 今の会議の進め方は、その方向性を私たち委員が考えるということですよ。社会教育委員の会議の進め方には、一般的に色々あって、教育長が諮問した内容について、社会教育委員が1～2年かけて答申や提言を考えるという方法もありますが、この会議では、これからの石狩市の社会教育の課題や、社会教育の役割そのものを委員が考えるという流れで、今日はその問題提起だと思います。徳田前委員長のお話を聞いて、この2年間どういう課題について考えていくかについて、話し合うということになろうと思います。

高橋委員：わかりました。自分が気になっている課題として、こういう勉強をするかたわら、市内にはごみの不法投棄が絶えません。市民のマナーはどうなっているのでしょうか。大人がこういう状況では、子どもに教育なんてできません。市民レベルでの運動などができないものかと思います。紅南小学校付近や緑苑台、樽川など、市内にはひどい状況の場所があります。

木村委員長：それは、石狩市民が捨てているのでしょうか。それとも市外の人間でしょうか。こういう問題を考える場合に、コミュニティの問題があるかもしれません。例えば、町内会に参加する住民が減って、地域の問題を皆で考える機会が無くなっているということも問題になっています。市外で働いていて、自分の町には寝に帰ってくるだけでは、町をきれいにする意識が生まれにくいなどの課題があり得るのかもしれません。

石井委員：ごみの不法投棄では、住宅地から少し離れた空き地や、新港に向かう途中などがひどいです。

高橋委員：石狩灯台の方は、市民運動でゴミ拾いなどがされているようです。他の場所でも市民運動が起きればいいのですけれども。

木村委員長：新港のごみ問題は、深刻な問題になっていると聞いた気がします。一般的な市民の道德意識の問題とは違うような気がしますね。その実態について、市民がきちんと認識しあえるような学習機会が必要だということだと思います。

高橋委員：現代社会は、人間同士の繋がりについてもだんだんと希薄になってきていて、それが色々な事件が起きることにも関係していると言われています。こういう事態を一体どうしたら良いのだろうかと思います。

大橋副委員長：私も7月に研修会に参加しましたが、社会教育委員として、地域との繋がりの中で、地域おこしが必要であると感じました。恵庭市の委員も言っていましたが、自分の地域の中で、ごみ、子育てなどの問題に取り組みたいのだけれども、実際にはなかなか自分ではできないので、活動の中心になる人材を発掘しなければならないと言っていました。そう考えた時に、社会教育委員としては、年2、3回の限られた会議だけでは、そういった課題に取り組めずに終わってしまうのではないかと思います。前委員の皆さんも、自主研修という場を作ったことは大変素晴らしいと思いますし、恵庭市のお話を聞いても、会議外で意見を交わす場を何回も積み上げて、今では委員同士の情報共有、関係性が良い感じに出来上がっているということでした。高橋委員が言われていたように、自分の町内会で抱えている課題などを出し合う場が必要ではないかと感じます。そういう活動を大きく広げていけば、石狩市全体の社会教育に繋がっていくのではないかと思います。

木村委員長：今のこの話自体が、石狩市のことを知る学習の場所になっていると思います。ごみや地域のつながりの問題について、今皆さんが考えている課題をこの場所に出していただいていることになっています。これらの課題について、皆さんがどう思っているかを話し合うことが大切だと思います。恵庭市の社会教育委員の例もありますが、石狩市のことを知る、あるいは社会教育委員が学ぶという意味では、この会議の場だけでは不十分だと思います。ただ、さらに会議をするためだけに集まるというのは、なかなか皆さんも時間が取れないと思いますので、例えば、具体的な事例が出てきた時に、市民の方々と一緒に関係者から話を聞いた

りする場を、社会教育委員が企画するというようなことは可能だと思います。

古村委員 : それぞれの方が自分の地域で色々なことをやっているということですが、私たち委員もそれぞれの活動を良く知らないと思いますので、皆さんがどんな活動をしていて、どんな問題意識をお持ちなのか、ひとりずつ話し合える場があればいいと思います。私は去年から、こどもまつりなどで、こども未来館に学生と一緒に関わっていますが、色々な大学から、色々な学生がボランティアで来ているので、学生同士仲良くなり、楽しく活動しています。こうした行事に参加することによって、ボランティアもこどもも成長できて大変良いと思います。その中で、困難を抱えている子どももいるということを感じました。こうした子どもに継続的な援助ができる場として、こども未来館もその一つとなりえるのだと思いますが、例えば市民カレッジで学んだ人が、子どもや若者の支援をしたり、学んだことを地域のために活用できる体制づくりについて、話題になれば良いと思います。

佐久間委員 : 私は石狩に住んで十数年になります。子どもが幼稚園と3歳の時に引っ越して来ましたが、子どもたちが小さい時に、石狩で子育てできたことはとても良かったと思います。札幌市はアパートやマンションがとても多く、ご近所付き合いが希薄なのですが、石狩では周囲の皆さんが草刈りをしてくれたり、ご近所同士の温かい人間関係があり、その中で子育てができました。子どもたちも、人ごみで雑多な札幌よりも、石狩の方がほっとしていますし、私自身、石狩がこれからも温かいまちであってほしいと思っています。

木村委員長 : コミュニティの捉え方については人それぞれ様々ですので、どのように考えるかは、とても大切なことですね。

高橋委員 : 私も三十年以上住んでおり、子どもを4人、石狩で育てました。当時は中学校の教員をしていて共働きでしたので、子どもを地域の皆さんに育ててもらったようなものです。本当に温かい地域でしたので、今は恩返しのつもりで、一日中いろいろな活動をしています。

木村委員長 : 本日はとても積極的なご意見をいただいておりますが、今年度の会議があと1回ですので、次年度の会議の具体的な方針を決めていく必要があります。地域課題のひとつである高齢化を例にすると、厚田、浜益もそうですが、石狩も団地造成で同時期に居住を始めた市民が多いので、非常に高齢化が進んでいます。その高齢化したコミュニティはどうなっているのか、ごみなどの問題について住民同士が支え合っていくことができているのか、そういうことについて、市民の皆さんと一緒に学ぶ機会を作るような方向を考えて、その議論を最後にまとめるということも方針の一つだと思います。例えばこれを、市民カレッジにも協力していただいて、地域課題について学ぶ講座を作っていただいたり、厚田・浜益に市民カレッジを広げるにはどうしたら良いかについて検討するのも良いと思います。私個人としては北大の協力を得て、スカイプのような手法で実現できるのではないかと思います。

今大切なのは、自分たちのコミュニティの現状がどうなっているのかを知り、課題についてどう取り組んでいくかということですので、次回の会議で検討するという事を私は考えておりますが、皆さんのご意見はいかがでしょうか。

相馬委員 : 私は何度か社会教育委員を経験しておりますが、社会教育委員の職務が何かと問われても、社会教育法の条文だけでは、理屈上はともかく、実際に何をすれば良いのか理解できませんでした。しかし、今日の徳田前委員長のお話を聞いて、社会教育委員自身も学習しなければ

ばならないし、地域の中に入って行って、色々な話を聞くことが大切だと思いました。今日のように色々な課題を提起し、話し合っ、場合によっては行政に情報提供をする必要があると思います。会議に出て意見を言うことだけではなくて、普段の生活の中で、色々なつながりを持ちながら、職場や地域、学校の中で学習したことを、色々な人達とのコミュニケーションの中で活用できれば、社会教育委員としての役割をひとつ果たしたことになるのではないかと考えます。例えば、「あいさつ」ひとつとっても学習だと思います。自分だけではなく相手にとっても学習になるわけで、社会教育委員が何をすべきかと悩まなくても、自分にできる範囲のことを実践していくことが、委員に与えられた職務なのだと思います。

石井委員 : 相馬委員のお話を聞いてほっとしました。私も石狩に住んで18年になります。4人いる子どもがほとんど大人になり、一番下の子が高校2年生の頃に札幌から引っ越してきました。みんな札幌へ勤めており、去年の秋に退職して家庭に入り、寝るだけの場所から暮らす場所になりました。今年初めて社会教育委員になり、第1回目の会議では、何をすれば良いのかわかりませんでした。2年間、自分がしっかり学習しながら務めていきたいと思っています。

高橋委員 : 他者との関わり、コミュニケーションということで、あいさつ運動をしてはいかがでしょうか。社会教育委員が率先して、日常の中であいさつをして歩くと良いと思います。

木村委員長 : どういうコミュニティをつくるかということに含まれる話なので、良いことだと思います。今日の話し合いを踏まえて、どういうコミュニティを作るのか、市民と一緒に学ぶ場をつくりながら、最後に学習の成果をもって提言をするという方向もひとつであると考えています。私と事務局とでたたき台を作って、次回の会議で提案させていただいて、それについて皆様からご意見をいただく方向で考えたいと思いますが、いかがでしょうか。

委員一同 : (全委員賛成)

木村委員長 : 以上で、第2回目の社会教育委員の会議を終わります。

議事録は上記のとおりであることを認めます。

平成25年 1月21日

石狩市社会教育委員の会議 委員長 木村 純
